

GIS を用いたアマルナ書簡の 言語地理学的研究(2)*

—一定形動詞として用いられる不定詞—

池田 潤†

キーワード：地理情報システム、言語地図、アマルナ文書、不定詞

1 はじめに

アマルナ語の動詞には定形が1種、定形で標示される文法カテゴリーの一部が標示されない非定形 (non-finite) が3種ある。この動詞組織の枠組みは基本的に聖書ヘブライ語 (表1) と同様である。

表1：聖書ヘブライ語の定形動詞と非定形動詞¹

		TMA	人称	性	数
接頭活用形		yes	yes	yes	yes
非 定 形	接尾活用形	no	yes	yes	yes
	分 詞	no	no	yes	yes
	不 定 詞	no	no	no	no

*本稿は、基盤研究 C (18520292) 「前 2-1 千年紀における北西セム語の等語線の再画定：GIS による言語地理学的研究」(研究代表者：池田潤、平成 18-21 年度) の研究成果であり、平成 21 年度西アジア言語研究会での口頭発表に加筆修正を加えたものである。

†筑波大学大学院人文社会科学研究所

¹池田 (2004: 81) より転載。TMA は Tense, Aspect, Mood の略。

このうち接尾活用形は主語の人称・性・数を接尾辞によって標示するが、表 1 が示すように TMA (テンス・アスペクト・ムード) に関して無標である。これに対し、接頭活用形は主語の人称・性・数を接頭辞 (一部は両面接辞) によって標示し、TMA を +Ø、+a、+u という語尾によって標示する (表 2)。

表 2: ウガリト語, アマルナ語, ヘブライ語の接頭活用形²

ウガリト語	アマルナ語	ヘブライ語	
yqtl+Ø	yaqṭul+Ø	wayyiqṭol	preterite
		yiqṭol	jussive
yqtl+a	yaqṭul+a	(ʔeqṭlō / niqṭlō)	volitive
yqtl+u	yaqṭul+u	yiqṭol	imperfect

分詞は性・数を標示するが、不定詞は表 1 の文法カテゴリーをいっさい標示しない。

聖書ヘブライ語の不定詞は形式と用法によって構成形 (infinitive construct) と絶対形 (infinitive absolute) とに下位区分される。qtl という 3 音語根をひな形として語形を示すと、構成形は qṭol (<*qṭul-)、絶対形は qoṭol (<*qatāl-) となる³。このうち不定詞構成形はもっぱら名詞として用いられる。そのため、文の主語となったり、動詞や前置詞の補語となったり、他の名詞や接尾代名詞と属格構造 (genitive construction) と呼ばれる名詞句を構成することができる⁴。これに対し、不定詞絶対形には接尾代名詞が付加されることがなく、次のような用法をもつ⁵。①名詞的用法 (文の主語や動詞の目的語となる)、②副詞的用法 (単独でも用いられるほか、同語根の動詞を強調したり、他の動詞と組み合わせる継続性・反復性を表す)、③動詞的用法 (文脈に応じて未完了、完了、命令、願望など様々な TMA を表す)。

²池田 (2004: 74) より転載。ここでのヘブライ語は聖書ヘブライ語を指す。

³詳しくは、Joüon and Muraoka (2006: 133) 参照。ヘブライ語の転写は、池田・高橋・池田 (2003) に従う。

⁴Joüon and Muraoka (2006, §124) 参照。

⁵詳しくは Williams (2007: 84-87) 参照。

アマルナ語では基本的に不定詞構成形と不定詞絶対形の区別はなく、不定詞の語幹は *qatāl-* 型となるが、定形動詞として用いられる例では *-i* という語尾を有することが多く、これにしばしば *-mi* ないし *-ma* という接語が付加される (Rainey 1996: 383-384)。

2 定形動詞として用いられる不定詞の地理的分布

アマルナ語の不定詞が定形動詞として用いられることを最初に指摘したのは W. F. Albright とその弟子 W. L. Moran (Albright and Moran 1950: 167) である。その後、Moran (1950) がピブロス発信の書簡に現れる用例を集め、この問題を詳細に論じている。近年になって、Rainey (1996: 383-388) がピブロス以外のアマルナ書簡を含めて不定詞が定形動詞として用いられる例を網羅的に集め、その用法を分類している。以下、Rainey の分類に従って、アマルナ語における不定詞の定形用例 (太字で示す) を確認する⁶。

2.1 Past Narrative

- (1) *pa-ta-a-ri* [^ma]d-da-ya a-di LÚ.MEŠ ma-šar-ti LÚ.ú-e-e
 depart+i PN with garrison+gen. officers+obl.
 [ša] [i]-din LUGAL-ri
 Rel. he+give+Ø king+my
 “[A]ddaya **departed** with the garrison troops [which] my king [had] given”
 (EA 287:46-48, Jerusalem)

- (2) *šum-ma ti-iš-mu-na a-šé-mi* ÉRIN.MEŠ pí-tá-ti
 if they-hear-U go-out+i+mi archer-troops+gen.
 ù i-zi-bu URU.MEŠ-šu-nu ù pa-aṭ-ru
 and leave+they cities+their and depart+they

⁶翻字と翻訳は基本的に Rainey (1996) に従う。語釈は筆者による。語釈に用いる略号は次の通り。Ø = ゼロ語尾、U = NAnt、A = NInd、nom. = 主格、gen. = 属格、acc. = 対格、obl. = 斜格、Neg. = 否定辞、Rel. = 関係詞、vent. = 来辞、mi = 不定詞の定形用法にしばしば付く接語、ma = 不定詞の定形用法にしばしば付く接語、i = 不定詞の定形用法にしばしば付く語尾、PN = Personal Name、GN = Geographical Name。

“If they hear ‘The army **has come forth**,’ then they will abandon their towns and they will depart” (EA 73:11-14, Byblos*⁷)

- (3) *ù* [a-]la-ak-mi a-na<-ku> a-na URU A.PÚ[.KI]
 and go+mi I to city GN
a-na da[-ba-b]i a-na ma-har m̃ha-mu-ni[-ri]
 to talk+gen. to before PN

“So ‘T! [w]ent to Beirut in order to plead before ‘Ammuni[ra]” (EA 138:51-52, Beirut)

- (4) *yi-de* [LU]GAL *i-nu-ma ma-qa-ti-ma a-<na>*
 he+know+Ø king that attack+i+ma to
 UN-nu *ù* *ša-ab-tu-še* DUMU.MEŠ *m̃iR-a-ši-ir[-t]a*
 people+our and seize+they+it sons PN

“May the king be apprised that **there was an attack** ag[ainst] our garrison(!) and the sons of ‘Abdi-Ashirta have captured it!” (EA 116:10-12, Byblos*)

2.2 “As soon as”

- (5) *a-še-mi* ÉRIN.MEŠ *pi-tá-tu* *ù* *ša-mu* *a-na*
 go-out+i+mi archer-troops+nom. and hear+they to
ú-mi ka-ša-di-ši *ù* *ta-ra-at* URU.KI *a-na* LUGAL
 day+gen. arrive+gen.+it and return+it city to king
be-li-ia
 lord+gen.+my

“As soon as the army **comes forth** and they hear about the day of its arrival, then the city will return to the king, my lord.” (EA 137:49-51, Beirut*)

- (6) *ù* *ma-ti-ma* *šu-ut* *a-nu* *i-de-šu*
 and die+i+ma he I I+learn+Ø+it
 “As soon as he **died**, I learned of it” (EA 89:38-39, Byblos)

⁷星印は発信地が Goren et al. (2004) の堆土研究によって検証されていないことを示す。詳しくは、池田 (2007) 参照。

- (7) *ka-š[a-d]i-ma* LÚ-*ia* ù *ra-ak-[š]a-šu*
 arrive+i+ma man+my and bind+he+him
 “As soon as my man **arrived**, he bound him” (EA 116:27-28, Byblos*)

2.3 Conditional Sentences

- (8) *pa-tá-ri-ma* *šú-ut* [ù] *ia-nu* *ša-a* *yu-ba-lu*
 depart+i+ma he and there-is-not Rel. he+carry+U
 [*tup-pi-ia*] *a-na* *mu-ši-ka*
 tablet+my to skull+gen.+your
 “If he **departs**, [then] there is no one who can deliver [my letter(s)] to you”
 (EA 113:40-42, Byblos*)

- (9) *al-lu* *pa-tá-ri-ma* LÚ.MEŠ *hu-up-ši* ù *ša-ab-tu*
 behold desert+I+ma people farmers+gen. and seize+they
 LÚ.MEŠ.GAZ.MEŠ ù URU
 ‘*apîru*-people and city
 “Behold, if the yeomen farmers **desert**, then the ‘*apîru* men will seize the city” (EA 118:37-39, Byblos)

- (10) ù *ti-[i]q-bu-na* *ša-bat-mi* *ni-[nu]* URU.KI.MEŠ *gub^{ub}-li*
 and they+say+U seize+Ø+mi we cities GN-gen.
 ù *mi[-na]* *ti-p[u]-šu* ÉRIN.MEŠ *pí-tá-tu*
 and what she+do+U archer-troops+nom.
 “And they are saying, ‘If w[e] **capture** the town(s) of Byblos, then wh[at] can the army do?’” (EA 129:32-34, Byblos)

- (11) ù *ti-₇-iq-bu-ni* *ša-bat-mi* *ni-nu-u₁₆* URU.MEŠ *gub^{ub}-li*
 and they+say+U seize+mi we cities GN-gen.
 ù *da-na-nu-u₁₆*
 and be-strong+we
 “And they are saying, ‘If we **capture** the town(s) of Byblos, then we will be strong” (EA 362:25-27, Byblos)

- (12) *ù š[a-al-šu] šum-ma la-a qa-bi-ti a-na ša-a-šu*
 and ask+him if Neg. say+I to him
a-pa-ši-m[i] at-ta ki-ta it-[ti] DUMU.MEŠ
 make+i+mi you treaty+acc. with sons
ᵐIR-a-ši-ir-ta ù la-qú-ka
 PN and take+they+you
 “But a[sk him] if I didn’t say to him, ‘If you **make** a treaty wi[th] the sons of ‘Abdi-Ashirta, then they will seize you’” (EA 132:30-35)

- (13) *ša-ma-ma «šu-nu» šu-nu i-nu-ma i-te₉-ru-bu i-na*
 hear+ma - they that I+enter+U in
 URU *šu-mu-ra* URU.MEŠ *an-nu-tu* GIŠ.MÁ.MEŠ *ù*
 city GN cities these ships and
 DUMU.MEŠ *ᵐIR-a-ši-i[r-]ta i-na še-ri ù [i]z-[z]i-za*
 sons PN in back and I+stand+vent.
 UGU *ù la-a i-le-ú a-ša ù ep-ša-at*
 against and Neg. I+can+U go-out+acc. and doing
 URU *gub-la [a]-na LÚ.MEŠ.GAZ.MEŠ*
 city GN to ‘*apîru*-people
 “If they **hear** that I am entering into Šumur, these cities (will be in) ships and the sons of ‘Abdi-Ashirta (will be) on land and I will be up against (them) and I will be unable to go forth lest Byblos go over to the ‘*apîru* men” (EA 104:43-53, Byblos*)

- (14) *pa-na-nu da-ga-li-ma [L]Ú KUR.mi-iš-ri ù*
 formerly see+i+ma man Egypt+gen. and
in₄-<na->ab-tu [LUGA]L.MEŠ KUR.ki-na-a[h]-ni iš-tu
 flee+they kings GN+gen. from
pa-n[i-šu]
 before+him

“Formerly, if they **saw** a man from Egypt, then the [ki]ngs of Canaan would flee from be[fore him]” (EA 109:44-46, Byblos)

- (15) [la]-qé-mi šī-a-ti [ù] [URU.gub-la] [ti-]il-q[ù]-na
 take+i+mi it and GN they+take+U
 “If they **capture** it (Baṭrôna), [then] they will take [Byblos]” (EA 129:20-21, Byblos)
- (16) [a-mur-m]i ba-li a-šī ÉRIN.MEŠ pí-t[á-ti] [i-na]
 Behold Neg. go-out archer-troops in
 [MU.š]a-an-ti an-ni-ti [ù] [la-]qú-mi U[R]U.ME[Š]
 year+gen. this+gen. and take+they+mi cities
 g[u]b^{u(b)}-la
 GN
 “[Behold], without the coming of the arm[y in] this [y]ear, [then] they [will ta]ke the town(s) of Byblos” (EA 129:40-42, Byblos)

2.4 定形動詞として用いられた不定詞の地理的分布

上記の用例が確認されている地点を星印(★)で示したのが図 1 である。なお、Tyre 以北の沿岸都市が海中にプロットされているが、これは 3 次元の地理座標を 2 次元に投影変換したために生じた歪みと考えられる。昨年より座標系の適切な投影変換の仕方を調査中であるが、まだ解決できていない。

図 1 を見ると、アマルナ語において定形動詞として用いられた不定詞はビブロス、ペイルート（北部）、エルサレム（南部）に分布している。一見したところ、この地理的分布から何らかの歴史言語学的知見が引き出せるようには思えない。ところが、後述するエルサレムの特殊性（3.1）および前 1 千年紀における地理的分布（3.2）を考えあわせると、図 1 の中に異なる様相が見えてくることになる。

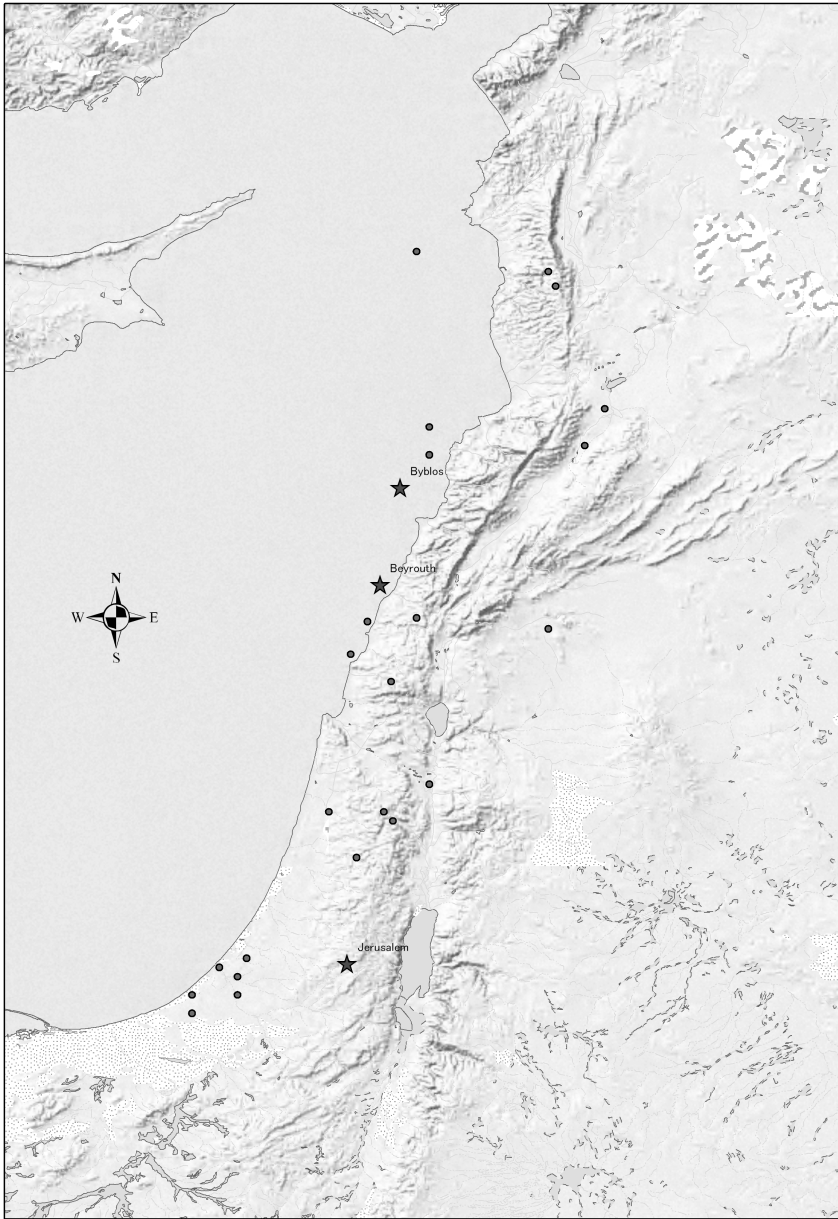


図 1: 定形動詞として用いられる不定詞の地理的分布 (前 14-13 世紀)

3 言語地理学的解釈

3.1 エルサレムの特殊性

エルサレムはカナン地域の南部に位置する (図 1)。カナン地域では古バビロニア語をカナン語風に組み替えた言語が古バビロニア風の書体で書かれた⁸。この傾向は北に行くほど希薄になる。言語的には、カナン語風に組み替えた語形が北に行くほど少なくなり、カデシュ以北ではむしろフリ語やアッシリア語の影響が強まる傾向にある。文字に関しては、北に行くほど同時代のメソポタミア本土で使われた書体に近づく。ところが、エルサレムではその立地におよそ似つかわしくないアッカド語が書かれていた。エルサレム発信のアマルナ書簡の書体は同時代のメソポタミア本土で使われたものに近く、言語にはアッシリア語の影響が色濃く現れている。このことに初めて気付いたのは、Moran (1975) であった。

なぜエルサレムでこのようなアッカド語が書かれたのかは不明である。おそらく、シリア北部で教育を受けた書記が何らかの事情でエルサレムの領主に雇われ、その書記がエルサレムにおいて独特の書記伝統を築いたのではないかと憶測されるが、立証は困難である。どのような事情があったにせよ、エルサレムの文字言語がカナンの地で不自然な「飛び地」を形成していたという事実には変わりはない。したがって、言語地理学的な分析においてはエルサレムという「飛び地」を度外視して考える必要がある。

エルサレムを度外視すると、図 1 の分布は池田 (2008) で扱った動詞語尾 *-(n)na* の地理的分布 (図 2 として次頁に再掲) とかなり類似してくる。池田 (2008) では、前 2 千年紀後半から前 1 千年紀前半のシリア・パレスチナの言語状況をふまえて動詞語尾 *-(n)na* の地理的分布を言語地理学的に分析し、それがフェニキアから南へ伝播した言語的改新であった可能性を指摘した。したがって、不定詞を定形動詞として用いる現象もまたフェニキア発の言語的改新であった可能性が出てくる。その反面、エルサレムを度外視すると、この現象の地理的分布はフェニキア地域内に収まるため、南への伝播は前 14-13 世紀の段階ではまだ起こっていないと考えられる。

⁸たとえば動詞は、古バビロニア語を語幹とし、これにカナン語の接辞を付けて屈折させる。詳しくは、池田 (1992) 参照。

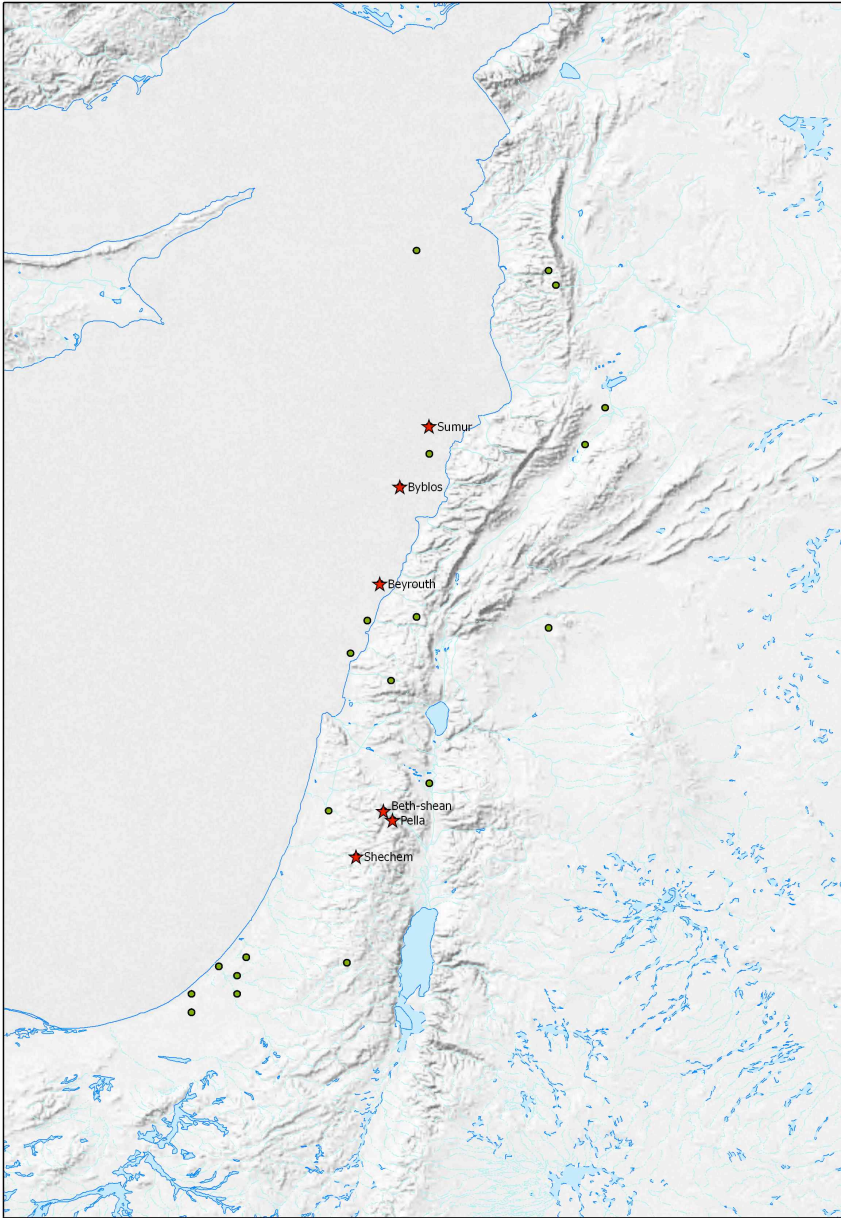


図 2 : 動詞語尾 -(n)na の地理的分布

3.2 前 1 千年紀における地理的分布

不定詞を定形動詞として用いる現象は、その後、フェニキアから南へと伝播したのであろうか。Garr (1985: 183-184) や Krahmalkov (2001: 209-214) によると、定形動詞として用いられる不定詞はサムアル、カラテペ、ビブロス出土のフェニキア語碑文において確認されている (図 3 の★)⁹。ヘブライ語碑文には定形動詞として用いられる不定詞は出てこない。Meşad Hašavyahu (Yavne-yam 付近の遺跡、図 3 の☆) 出土の書簡に用例を認める説があるが¹⁰、Garr (ibid.) は否定的である。もし Meşad Hašavyahu の例が当該現象に該当しないならば、この不定詞の用法の南への伝播は前 1 千年紀においても前 2 千年紀と大差ないことになる。

これに対して興味深いデータを提供してくれるのがヘブライ語聖書である。ヘブライ語聖書には定形動詞として用いられる不定詞絶対形の用例が多数あるが、Rendsburg (2004: 22-23) は独自の方法によりこれを北部イスラエル方言の特徴と断定する (Ikeda 2003: 51-54 も参照)。ヘブライ語聖書は書かれた場所も年代も確定できないため、言語地図上にプロットすることはできないものの、この不定詞の用法が前 1 千年紀のある段階でイスラエルの北部にまで達していたことを間接的に示す貴重なデータと言えよう。

4 結論

本稿では、GIS を用いたアマルナ書簡の言語地理学的研究の事例として定形動詞として用いられる不定詞の地理的分布を可視化したうえで、それを前 2 千年紀後半から前 1 千年紀前半のシリア・パレスチナの言語状況をふまえて言語地理学的に分析し、それがフェニキア (以北¹¹) から南へ伝播した言語的改新であった可能性を指摘した。

⁹これらの碑文の年代は前 9-5 世紀。カラテペ (トルコ南東部アダナ州) 出土のアザティアワダ碑文における用例については、竹内 (2006) が詳しく論じている。

¹⁰Meşad Hašavyahu 碑文の 5 行目および 6-7 行目の *w'sm* “and he stored”。この語形の解釈については、Gogel (1998: 267, n. 30) 参照。

¹¹不定詞絶対形はウガリト語でも定形動詞として使われるため (Gordon 1965: 80)、正確にはフェニキア以北とすべきであろう。



図 3 : 定形動詞として用いられる不定詞の地理的分布 (前 9-6 世紀)

【参考文献】

- Albright, William F., and William L. Moran (1950) 'Rib-Adda of Byblos and the affairs of Tyre (EA 89)'. *Journal of Cuneiform Studies* 4: 163-168.
- Garr, W. Randall (1985) *Dialect geography of Syria-Palestine, 1000-586 B.C.E.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gogel, Sandra L. (1998) *A grammar of epigraphic Hebrew*. Atlanta: Scholars Press.
- Gordon, Cyrus H. (1965) *Ugaritic textbook*. AnOr 38. Rome: Pontifical Biblical Institute.
- Goren, Yuval, Israel Finkelstein and Nadav Na'aman (2004) *Inscribed in clay: provenance study of the Amarna tablets and other ancient Near Eastern texts*. Tel Aviv: Emery and Claire Yass Publications in Archaeology.
- 池田潤 (1992) 「アマルナ語：紀元前 2 千年期のピジン」『オリエント』35(2): 1-21.
- Ikeda, Jun (2003) 'Three notes on Israelian Hebrew syntax'. *Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan* 38: 51-65.
- 池田潤 (2004) 「アマルナ語から見た聖書ヘブライ語の接尾活用形」『言語研究』126: 69-92.
- 池田潤 (2007) 「カナン発信のアマルナ書簡の位置情報について」『一般言語学論叢』10: 93-116.
- 池田潤 (2008) 「GIS を用いたアマルナ書簡の言語地理学的研究(1)：動詞語尾 -(n)na の地理的分布」『一般言語学論叢』11: 139-156.
- 池田潤・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について：文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6: 61-106.
- Joüon, Paul and Takamitsu Muraoka (2006) *Grammar of Biblical Hebrew*. Revised edition, Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico.
- Krahmalkov, Charles R. (2001) *A Phoenician-Punic grammar*. Leiden: E. J. Brill.

- Moran, William L. (1950) 'The use of the Canaanite infinitive absolute as a finite verb in the Amarna letters from Byblos'. *Journal of Cuneiform Studies* 4: 169-172.
- Moran, William L. (1975) 'The Syrian scribe of the Jerusalem Amarna letters'. In: H. Goedicke and J. J. M. Roberts (eds.) *Unity and diversity*, 146-168. Baltimore: Johns Hopkins University.
- Rainey, Anson F. (1996) *Canaanite in the Amarna tablets: A linguistic analysis of the mixed dialect used by the scribes from Canaan*. 4 volumes. Leiden: E. J. Brill.
- Rendsburg, Gary A. (2004) 'A comprehensive guide to Israelian Hebrew: Grammar and lexicon'. *Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan* 38: 5-35.
- 竹内茂夫 (2006) 「アザティアワダ碑文のフェニキア語部分における非過去を表す不定詞絶対形再考」城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会 (編) 『実験音声学と一般言語学』 496-505. 東京堂出版
- Williams, Ronald J. (2007) *William's Hebrew syntax*. Third Edition, revised and expanded by J. C. Beckman. Toronto, Buffalo, London: University of Toronto Press.

GIS-driven linguistic geography
of Amarna letters from Canaan (2):
A case of the infinitive used as a finite verb

Jun IKEDA

This paper deals with the geographical distribution of the infinitive used as a finite verb within the Amarna letters from Canaan. Based on linguistic-geographical analyses of the map showing the distribution of the infinitive used as a finite verb and some pertinent linguistic and circumstantial evidence, it argues that such usage of the infinitive may have been a linguistic innovation spread from (north of) Phoenicia to the south at certain point in the first millennium B.C.

Doctoral Program in Literature and Linguistics

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: ikeda.jun.fm@u.tsukuba.ac.jp